［音　楽］

鑑賞の観点を自己内で意識化させるための小学校音楽科の実践

若井　義弘*

1　はじめに～鑑賞指導における課題の所在

平成18年８月の中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（第３期第29回及び第30回）では，「音楽科，芸術科（音楽）の現状と課題，改善の方向性（検討素案）」が提示された。その中で述べられている「現状と課題」の課題として，以下の内容が挙げられている。

○　音楽を表現する技能と鑑賞する能力の育成においては，児童生徒が，音や音楽を知覚し，感性を働かせて感受（感じ取り）することを重視することが求められている。（以下略）

また，「改善の方向性」として，「鑑賞の指導のあり方」について次のように提言している。

○　音楽のよさを生み出しているさまざまな要素の働きなどを聴き取ったり，音楽に対して，根拠をもって自分なりに批評したりすることのできる力を育成する指導を一層充実してはどうか。（下線部，若井）

昨今，国語科以外の教科においても読解力向上に関する議論が様々にされているが，上記の内容はそれらの影響を受けてのことかもしれない。いずれにせよ，児童・生徒が受動的な姿勢ではなく，能動的に自ら進んで音楽にかかわろうとする姿勢を期待しての提言であろう。

今までの音楽鑑賞というと，楽曲の特性に応じた指導内容はあるものの，その子が感じた印象や想像したイメージが最優先される傾向が全体的にあったように思う。

しかし，前述の提言にあるような「根拠をもって」「自分なりに批評する」という視点を意識するのであれば，印象論からの脱却を意識した指導を行う必要がある。さらに，下線部にあるような力は短時間で身に付くものではないと考えるため，その指導は一過性のものではなく，積み重ねを必要とする継続的なものでなければならない。

前述の提言の下線部にあるような力を育成するには，どのような鑑賞指導を行えばよいのか。そこで筆者は，鑑賞指導のあり方を改めて見直してみたいと考えた。

2　鑑賞指導で育む能力について

ところで，鑑賞については指導が難しいという声が聞かれて久しい。様々な指導案や実践を見渡しても，表現に関するものに比べて，鑑賞に関するものは圧倒的に少ない。それは，鑑賞指導の難しさを教師が感じているからではないだろうか。それらの理由として次の事項が考えられるとする指摘がある。[1)]

・子どもにどのような音楽の力をつければよいのか分からない。

・鑑賞曲のおもしろさやよさ，美しさを生み出しているところが分からない。

・子どもが鑑賞曲に興味や関心をもってくれても，それを深めることができない。

これらの問題は，今後の鑑賞指導の方向性を考える上で忘れてはならない指摘であると考える。

ここで，現在の学習指導要領において定められている鑑賞の内容について触れる。

鑑賞に関する目標は，全学年を通じて「音楽の美しさを味わって聴き，様々な音楽に親しむようにする。」とされており，内容については以下の説明が続く。

「音楽の鑑賞指導においても，他の芸術作品と同じように音楽作品のよさや価値を知り，味わうことが重要なねらいとなる。しかしそのためには，まず，音楽を聴いて様々なよさや特徴を感じ取ることができなくてはならない。このような音楽聴取の能力は，大きくは「曲想」「要素・構成」「表現媒体」の三つの観点，すなわち楽曲全体の曲想

＊ 上越市立下保倉小学校

の変化，楽曲を特徴付ける要素や構成，楽器や声の特徴などを感じ取って聴く活動を通して育てられるものである。」[2)]

「曲想」「要素・構成」「表現媒体」の三つの観点については，第１学年及び第２学年，第３学年及び第４学年，第５学年及び第６学年のそれぞれにおいて具体的に提示されている。つまり，これら三つの観点は小学校六年間において繰り返し指導されている事柄である。そして，これら三つの観点は完全に分離したものではなく，分けがたく結びついている場合が多いと考えられる。

このようにして身に付けた鑑賞の能力は，歌うことや楽器を演奏すること，音楽をつくって表現することなど，すべての音楽活動の基盤となるものであるという指摘は，学習指導要領においても述べられていることである。[3)]

しかし，実際の授業では教材曲の特性にばかり目がいき，三つの観点の系統，その後の継続的な指導という視点が欠けている場合が少なからずあるのではないだろうか。つまり，その場限りの指導，その曲限りの指導で終わり，その学習で学んだ観点が他の曲を聴く際にも生かされる。または，その学習で学んだ観点が，表現活動の場面でも生かされるという意識がやや欠落しているでのはないかということである。

ところで，教えるという視点から音楽を見た場合，大きく三つの側面があると渡邊は指摘している。[4)] それは，教えられない側面，教えられないが育てられる側面，そして教えられる側面の三つである。

渡邊は，音楽の本質である「音楽美」は「教えられないもの」に属すし，「美的感覚や美意識」あるいは「音楽を愛好する心情」は，直接教えることはできなくとも「育てられるもの」であるとしている。それに対して，音楽の中で「教えることができるもの」は，かなり客観的に教えられるものであり，それらは非常に多い。そして，それを指導の中心に置くということは，音楽鑑賞の現実的な目標である「音楽により多くの興味・関心をもたせ，音楽を愛好する心情を育てる」に近づくためのひとつの手段であり，材料にすぎない，ということを常に念頭におくことで，指導方法が変わってくるのではないかと指摘している。

またこれは，「子どもたちが音楽を聴いて何を感じ，何に興味をもち，それをステップとしてさらにどのように発展させていくか。」「教えられることを素材にして，子どもたちにいかに音楽に興味をもたせていくか。」という指導の重要性を示唆するものである。この視点は，鑑賞指導のあり方を見直す際に必要不可欠であると考える。

3　鑑賞教育において期待する子どもの姿

前述した様々な指摘や提言を踏まえた上で，音楽の鑑賞教育において期待したい子どもの姿を，筆者は次のように考えた。

音楽を聴いて感じ取ったそのよさや味わいなどについて，音楽についての概念や音楽上の用語などを学習経験に応じて適切に用いながら，根拠をもって自分なりに説明する（発言をしたり文章に書いたりして表す）姿。

鑑賞指導の評価は特に低・中学年においては動作化と関係付けて行われることが多いが，学年が上がるにつれて感想によって評価する場合がどうしても多くなる。これは，児童の文章表現力と関係することにもなり，語彙が多い子や文章をたくさん書いたり速く書いたりできる子にとって有利になることも考えられる。よって，鑑賞指導の評価を考える際，この点を克服する視点が必要となる。

また，このような姿を期待するためには，「音楽の様々な要素を理解するための観点（ツール）を自ら獲得し，それを使うことができる」ことが前提となる。それは，一過性の指導で身に付くものではなく，継続した教育の結果として身に付くものであり，「点の指導ではなく，線の指導」こそが必要である。そして，評価を個人のものだけにしておくのではなく，全体に広めていくことも重要な点である。そうすることで，個の中のツールの種類が広がっていくであろう。

これらの「継続性・反復性（題材内における短期と，六年間における長期という両方）」と，「全体での観点（ツール）の共有化」という２つの視点を意識してこそ，上記の姿を期待できると考える。

4　実践の概略

⑴　４年生における鑑賞指導「木管楽器の音をききくらべましょう」

表現媒体，すなわち楽器の音色の特徴に注目する題材である。

語彙が少なく，文章表現が苦手な児童が多いことを考慮し，「鑑賞のヒント」として，曲想を表現する言葉を予め

準備しておき，それを音楽室の壁や黒板に掲示しておいた。鑑賞の際には，それらの言葉をヒントとして用いてもよいことを子どもたちに伝えた。（資料１）また，同じ言葉を書いた黒板掲示用カードも予め準備しておいた。

鑑　賞　の　ヒ　ン　ト

言葉がうまく思いつかない人は，次のような言葉をヒントにしてね。例えば…

○楽しい　○悲しい　○明るい　○暗い　○堂々とした　○ゆったりとした
○のどかな　○弱々しい　○にぎやかな　○静かな　○おだやかな　○幸せな
○元気な　○力強い　○はなやかな　○かがやかしい　○はしゃいだ　○ふわふわした
○おそろしい　○さびしい　○やさしい　○落ち着いた　○美しい
○すがすがしい　○キラキラした　など…

この他にも，まだまだいろいろありますよね。例えば…

○踊りたくなるような　○走り出したくなるような　○泣きたくなるような
○眠りたくなるような　○空を飛んでみたくなるような　など…

また，次のような表現もありますね。

○朝の感じ　○夕方の感じ　○真夜中の感じ
○宇宙が広がっている感じ　○田んぼが広がっている感じ　○電車に乗っている感じ
○そうじをしている感じ　○いそがしく動いている感じ　○らくだが歩いているような感じ
○波が次々と寄せてくるような感じ　○雨が降っている感じ　など…

大切なことは，

音楽をよく聴いて，自分が感じたことを素直に書くこと　です。

（資料１　子どもたちに提示した鑑賞のヒント）

以下は，歌唱教材『とんび』（梁田貞作曲）をフルート，クラリネット，オーボエの演奏で聴いた子どもたちの感想である。

【フルートの音色】
・とっても優しい感じでした。フワフワとしている感じでした。
・透き通る感じ。音がきれいでまっすぐしていました。
・明るくて幸せな感じ。落ち着いた気持ちになる感じがしました。
・森の中で音が響いているようでした。音が鳴ったら，森の動物たちが集まってきそうな気がしました。
・眠たくなるような感じがしました。すごく気持ちがよくなりました。
【クラリネットの音色】
・のんびりした音です。優しいお母さんのような音でした。
・幸せでゆったりとしている。のんびりした感じ。　・草原で遊んでいるような感じ。
・優しくて静かな感じ。眠たくなる感じ。　・ゆったりとしていた。落ち着いている。
・ふわふわした雲の上にいるように感じました。雲の上にずっといたいなあ。
・自分たちがいつも吹いているリコーダーよりも低い音でした。
・低い音が出たり，高い音が出たりしていました。

【オーボエの音色】
・昔ながらの音色という感じがしました。
・昔の風景が現れる感じがしました。　　・耳にずっと残っていそうな感じ。
・音が良く響く。大きくてきれいな音でした。　　・面白い感じの音。元気が出そうな感じ。

資料１のヒントを参考にしないで感想を書く子もいれば，ヒントをよく見ながら安心した表情で感想を書く子の姿も見ることができた。

上記の感想では，他の楽器の音色，あるいは他の楽曲を聴く際にも参考となるであろう特徴的な記述をいくつか見ることができる。例えば，「ある場面（森の中，草原，雲の上）を想像する。」「他の楽器の音色と比べる。」「その楽器の低音域と高音域の響きの違いに気が付く。」などである。

こうした感想を教師の方で確認した上で，全体の場で子どもに返してみた。「友達はこんなことを感じて，感想を書いていました。同じようなことを感じた人はいますか？」「本当にそのような感じがするのかな？」「どうしてこのようなことを感じたのかな？」などと，問いかけてみたのである。

すると，「ぼくは，あまり気が付かなかったなあ。」「だから先生，もう一度聴いて確かめてみたいです。」という声が，子どもたちの中から多く聴かれた。

ある子が気が付いた一つの観点（ツール）を全体に提示し，共有し，再度鑑賞する。こうした経験を繰り返すことによって，目的意識をもって何回も聴くことができ，感じたことをさらに様々な言葉を使って表現できることとなった。

その後，『とんび』を聴いた後は，それぞれの楽器の独奏曲を聴いて感想を書く活動を行った。実物の楽器に触ったり，楽器を吹く真似をしたりという活動を盛り込みながらその音色に浸った。感想では，「優しい音も，強い音も聞こえた。元気で速めの曲で，ピエロがテキパキと動いているような感じ。でも後からきれいな音になった。」【クラリネット『クラリネットポルカ』（ポーランド民謡）】，「誰かが森にやってきて，動物たちがダンスを踊っているみたい。その森にやってきた人は，オーボエで不思議な曲を吹いている感じ。」【オーボエ『ガボット』（ラモー作曲）】という感想が見られた。標題音楽ではないが，場面を想像して自分のイメージを膨らましたり，曲の感じと音色の感じの両方に注目して聴く子の姿を見ることができた。

この活動では，個人の枠の中だけに感想をとどめておくのではなく，周囲の人と関わりながら，互いの感想を共有し合うことで，その曲や楽器の音色に対するイメージを膨らませることができたと思われる。そのため，鑑賞カードへ書き込む量が増えたのであろう。

⑵　６年生における鑑賞指導「いろいろな音楽のひびきをきき比べましょう」

高学年ともなると，今までの音楽の授業において，様々な観点をもって様々な楽曲を聴く活動を経験済みである。

そこで，今までに習得した，楽曲を聴く際の様々な観点を整理して子どもたちに提示し，それを積極的に活用する経験を繰り返し行う。そうすることによって，ただ漠然と楽曲を聴くのではなく，自ら積極的に聴き取ろうとする姿勢の伸長につながるものと考える。

しかし，これは単なる知識の習得に終わるのではなく，あくまでもこれが自己の表現活動の際に活用されたり，あるいは他の楽曲を聴いたときに「前に聴いたあの曲と構成が似ているなあ。」と感じたりするなど，他の活動との関連が図られることが大切である。

本題材は，チェンバロやパイプオルガン，ピアノ，ジャズビッグバンドなどの様々な響きを聴き比べる活動である。楽曲を聴く前に，小学１年生からの今までの音楽鑑賞の活動において学習してきた様々な観点について，子どもたちと一緒に確認を行った。その観点は，以下のとおりである。

○リズムの特徴　○メロディの特徴や感じ　○ハーモニー，響きの重なり　○拍の感じ　○テンポ
○大きい・小さい，速い・遅い，高い・低い，という対比　○コールアンドレスポンス
○繰り返しによる変化　○変化の様子（少しずつなのか，突然なのか，間があるのか。その間の長さは？）
○主題　○楽器の音色の感じ

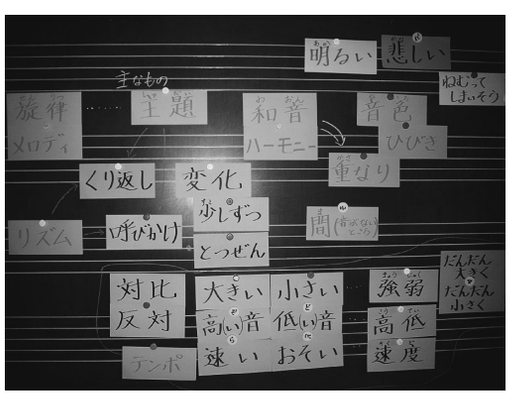
これらは，過去の学習でカードとして黒板に掲示されてきたキーワードである。例えば，５年生で聴いた『威風

堂々第一番』（エルガー作曲）では，「主題の繰り返し」「音が高くなる」「前よりも音が大きくなる」などの“音楽の仕組み”によって，楽曲が盛り上がりをみせることを学習した。さらに，それを『威風堂々』のリコーダー奏に生かすことを行った。

こうしたキーワード（＝観点，ツール）を示したカードは，今まで機会に触れて子どもたちに提示をしてきた。それは，歌唱や器楽演奏などの様々な表現活動においても同様である。

キーワードを確認した後は，演奏を聴き，感想をカードに記入した。

〇チェンバロによる演奏『バロック　ホーダウン』（ジャン＝ジャック ペリー，ガーション キングスレー作曲）
・最初はゆっくりとしたテンポでスタートし，しばらくすると速くなった。とても楽しい感じ。最後は，またゆっくりとなった。でも，最初と最後では，少し雰囲気が違う。
・最初に流れていたメロディが，繰り返し何回も流れている。ディズニーランドのパレードで流れているメロディなので，親しみがある。チェンバロの音色がこの曲に合っている。
・高い音はピアノみたいだけれど，低い音はギターの音に似ていると思った。
〇パイプオルガンによる演奏『トッカータとフーガから』（Ｊ．Ｓ．バッハ作曲）
・音がない時に，間があるとすごく響く感じがしていた。
・手を離しても，音が鳴っている。いつまでも響いていそうな感じがした。
・前の音と，今響いている音が重なっている。音の重なりがピアノと感じが違う。
・ものすごくたくさんの音が重なり合っているように聞こえた。
・和音でものすごく低い音が聞こえてきた。地の底から聞こえてくる感じ。
・チェンバロとは全然違って，正反対の感じがする音。
・独特の音がする。（どんな楽器とも違う。）
〇ピアノによる演奏『子犬のワルツ』（ショパン作曲）
・全体的に速い曲だけれど，ゆっくりになるところもある。また，音が大きくなったり小さくなったりしている。
・ピアノを弾いている人の指が踊っているような感じ。よくこんなに指が動くなあと思う。
・子犬が踊っているような感じがする。同じメロディが繰り返されている。



児童は，今までに学習してきた楽曲の構成や特徴に関するキーワードを意識して，感想を書いていた。

『トッカータとフーガ』では，１回目に聴いたときは「ガーン，失敗した～という感じ。」「だんだん暗くなってくる。」等と，印象のみにとらわれていた子が少なくなかった。そこで，「パイプオルガンという楽器の音色に注目すること，特に音の響きに耳を澄ませてみてごらん。」と呼びかけをした。すると，上記のように音の重なりや余韻に注目するコメントが一気に増えた。

また，(1) での実践と同様に子どもたちから出た感想を全体に返すことによって，自分が気が付かなかった観点に注目し，２回目以降の鑑賞で目的意識をもって聴くことができた子が多かったようである。

5　考察と今後の課題

鑑賞活動が単なる連想的な，描写的な聴き方にとどまるのであれば，３において述べた「音楽を聴いて感じ取ったそのよさや味わいなどについて，音楽についての概念や音楽上の用語などを学習経験に応じて適切に用いながら，根拠をもって自分なりに説明する子どもの姿」には迫ることはできないであろう。

そこで，４において述べた実践のように，「曲想を表現する言葉を予め提示しておく」「今までに学習してきた，楽曲を聴く際の様々な観点を予め提示しておく」ことによって，子どもたちは自信をもった様子で授業に取り組むようになってきた。「何を書いてもよい。」「何を書けばよいのか分からない。」という鑑賞の学習ではなく，「何について聴けばよい。」「何について書けばよい。」という観点がより明確になったからであると推測する。また，その観点を学級全体で確認し共有することにより，楽曲に繰り返し触れ，その楽曲に対する親しみが増すということにもつな

がった。

また，こうして音楽の要素や仕組みを繰り返し意識させることによって，歌唱の活動において「同じメロディが繰り返し出てくるから，少し変化をつけたいなあ。」「歌詞の内容から考えて，ここは優しく語りかけるように，ここは元気に大きく歌った方がいいよ。」という発言が，子どもたちの口から出るようになってきた。つまり，習得した事柄を自ら使いこなすということを繰り返すことによって，音楽的な感受がより一層深まり，より自立的に主体的に音楽活動に参加する子どもの姿が増えてきたのである。

正確なデータをとってきたわけではないが，既習事項との関連が図られた発言や活動が見られることから，一応の成果があったものと思われる。

これは，一過性の指導と言うよりも，６年間の積み重ねとして考えねばならない。

学習指導要領では，第１学年及び第２学年において「楽曲の気分」「リズム」「旋律」「速さ」「楽器の音色」を，第３学年及び第４学年において「曲想の変化」「主な旋律の反復」「副次的な旋律」「音楽を特徴付けている要素」「楽器の音色及び人の声の特徴やそれらの組み合わせ」を，第５学年及び第６学年において「曲想の全体的な味わい」「主な旋律の変化や対照」「楽曲全体の構成」「音楽を特徴付けている要素と曲想とのかかわり」「楽器の音色及び人の声の特徴やそれらの音や声の重なり」を，鑑賞の指導内容として定めている。[5)]

これらを意識しながらも，上学年で学習すべき内容を，必要に応じて下学年において取り上げる。また，下学年の学習内容を，上学年においても繰り返し取り上げる。こうした指導によって，楽曲を鑑賞する際の様々な観点を，子どもたちが自然と意識するようになり，音楽的な感受がより一層深まるものと考える。そして，このような必要に応じて行われる各学年間を超えた指導は，鑑賞活動に限らず，歌唱や器楽演奏などの表現活動においても繰り返し行われるべきことであるとも考える。

そのためにも，６年間の音楽活動における指導内容の関連をより明確化する必要がある。実際，鑑賞曲は共通教材がなく授業者が選択することになっているので，学習のねらいを明確にすると同時に，他の活動への応用を意識した活動計画を作成しなければならない。それと同時に，学習内容が継続的に意識されるために，「曲想を表現する多くの言葉を分かりやすくまとめた掲示」や「様々な音楽記号と，音楽を特徴付ける要素や仕組みとを関係付けた掲示」「子どもが関心をもつような，作曲者を紹介した掲示」などの音楽室の環境作りの必要性も感じている。

引用文献

１）『教育音楽　小学版』第62巻第１号，音楽之友社，2007年，61pp
２）文部省『小学校学習指導要領解説　音楽編』，教育芸術社，1999年，19pp
３）同上，32pp，48pp，66pp
４）渡邊學而『子どもの可能性を引き出す　音楽鑑賞の指導法』，音楽之友社，1987年，42～48pp
５）文部省『小学校学習指導要領解説　音楽編』，教育芸術社，1999年，106～107pp

参考文献

○『音楽鑑賞の指導と評価』，社団法人音楽鑑賞教育振興会，1985年
○『教育音楽別冊　音楽がおもしろくなる鑑賞指導のくふう』，音楽之友社，1990年
○八木正一編著『小学校中学校鑑賞教材の指導・全事例』，学事出版，1993年
○金本正武・小原光一『対談・小学校新教育課程　音楽科の授業をどう創るか』，明治図書，1999年
○大熊藤代子・内田有一・薬袋貴『危機に立つ音楽科教育』，遊タイム出版，2002年
○『音楽鑑賞教育　No.459』音楽鑑賞教育振興会，2006年
○『初等教育資料　平成19年２月号』(No818)，東洋館出版社，2007年，